

〔国 語〕

○ 実 施 時 間 【8：30～9：20】（50分）

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は 一 ～ 三、16 ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて^{かんとく}監督の先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「 」や（ ）なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

一

次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① ギイホウのありかを示す地図を手に入れた。
- ② 友人の誕生日会にシヨウタイされる。
- ③ 大きな声を出してシユウモクを集める。
- ④ 親コウコウをすることは大事だ。
- ⑤ 親戚にタワラをかつげるほどの力持ちがいる。
- ⑥ 明治時代のカンエイ工場を見学する。
- ⑦ ザツコク米を食べる。
- ⑧ サンピが分かれるテーマで討論をする。
- ⑨ 定期的に大会でエンソウする機会がある。
- ⑩ 話の内容に対してギモンをもつ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たくさんお金を稼いで、SNSで自慢できるような生活をするのが、カッコいいと本気で思っている大人が、世の中にはどれだけ多いことか。問題は、その憧れの生活が「自然を大切にすることと相容れない」という事実である。

たしかに、華やかな生活は魅力的だ。スーパーやデパートに行けば、世界中のものがなんでも手に入る。欲しいものも、無限にあるだろう。

けれども、そうやって、何でも手に入るような暮らしを続けるためには、いろいろな資源を世界中で掘りつくして、日本に集めてこないといけない。A、和食は美味しいと言うけれど、日本は食料自給率がとても低く、3割台しかない。種子、肥料、耕作機

なども入れると、ほとんどが海外からの輸入に頼っている。「日本の食卓の豊かさ」などというものは幻想だ。海外の食品を買い叩いているにすぎない。300円の牛丼は、まさにその象徴である。

食事だけでない。石油、石炭、アルミニウム、リチウム。私たちの日常に欠かせないものの原料は、多くが外国からの輸入品である。日本の豊かな生活の裏では、熱帯雨林の森林伐採が進行し、生態系が破壊されている。

要するに、今の日本の豊かな生活が地球にかけている負荷は計り知れない。今の生活は、便利で、快適だが、その便利さは、「遠くに」住む人々やその自然環境に極めて大きな犠牲を強いているのである。

ところが、これまでこうした犠牲は、ブラジルとかインドとか、日本人の生活には直結しない、「遠いところ」で繰り返されてきたため、無視されてきた。それがついに、気候変動やパンデミックという形で、日本でも深刻な問題を引き起こしつつある。

今後、気候変動によって、世界的な食糧危機が生じれば、食料自給率の低い日本も影響を被る。その時、私たちの生活はどうなるだろうか。今回のパンデミックの時に、マスクや消毒液も手に入らず、困ったのを思い出そう。

一見、とても豊かで、なんでも売っているようにみえるけれど、実は、日本は生活に必要な不可欠なものを作ることができない。利益優先で、効率性やコストカットだけをひたすらに求めていくと、最終的には、思わぬ形で、危機への対応力を失ってしまうのであ

る。

ここでのスキャンダルは、^{注4}多国籍アグリビジネスや石油メジャーは、ウイルスや気候変動の危険性を十分にわかっていたにもかかわらず、自然の破壊を続けてきたということである。パンデミックも気候変動も、科学者たちは警告していた。けれども、そうした警告は、意図的に無視されたのだ。

なぜだろうか。大人たちは、乱開発から恩恵を受け、豊かな生活を享受することができたからだ。 **B**、政治家も、企業も、そして私たち消費者も、そのような行為を黙認し、問題解決を、ひたすら先送りしてきたのである。

そして今、大人たちが楽な選択をしてしまったことのツケを全部、未来の世代に払わせることになっている。間抜けな大人たちの **X** ぬぐいを、子どもたちに押し付けてしまうことを、大人たちは本当に反省しなくてはならない。

未来への大分岐

そんななか、今回の新型コロナウイルスは多くのことを気付かせてくれた。人類は今度こそ反省し、失敗から学ぶ必要がある。もしかすると生活を改めるためのラストチャンスかもしれない。その意味で、私たちは^②未来の分岐点に立っている。

まず、専門家や政治家は、ウイルス対策を必死に考えているけれど、なかなかうまくいっていない。これだけ経済や技術が発展している、ウイルスのような自然の脅威を前にしては、結局人間は無力なのだ。社会の繁栄^{はんえい}というのは、非常に脆弱^{じゅうじやく}で、繊細^{せんさい}なののである。だからこそ、人間は自然を自在に支配できるといふ驕り^{おごり}を捨てなくてはならない。自然を健康な状況^{じょうきょう}にしておかなければ、そのしつぱ返し^③は、自分たちのところへ跳ね返ってくる。

また、私たちは「ソーシャルディスタンス」に、日々苦勞している。距離^{きょり}を取ろうとすればするほど、私たちは^④普段^{ふだん}どれほど他者とつながっているかを痛感させられるのだ。今まで当然のように手にしていた商品も、生産、物流、販売^{はんばい}、デリバリーなど、多くの人の手を通して、自分たちのところに届く。他者とつながることのみ、私たちの生活は可能である。けれども、それが同時に感染拡大のリスクになっている。

そんななか、世の中には、大金持ちで、最新テクノロジーを駆使^{くし}して、快適なテレワークをしながら、アプリで食事や買い物、デリバリーを頼んでいる人もいる。けれども、医療、保育、教育、介護^{かいご}などの「エッセンシャルワーク」と呼ばれる、社会にとって不可欠な仕事に従事している人は、他者と距離を取ることができない。そうした人は、^⑤大きなリスクに晒^{さら}されながら、低賃金で必死に働いている。

気候変動の場合も、もしあなたがとても裕福^{ゆうふく}であれば、別の国に引っ越せるかもしれない。水や食糧の価格が高騰^{こうとう}しても、問題なく支払うことができるだろう。でも、そんなことができるのは、一握りの人だけだ。

その一握りのグループに入ろうとして、必死に頑張^{がんば}るのも一つの選択肢^{せんたくし}である。 **C**、今のような大量生産・大量消費を続けるなら、「普通の」暮らしをできる人の数はますます減っていく。そう、コロナ禍^かで、「普通」の生活をできる人が大きく減ってしまったように。

危機が深刻化するときには、今まで通りのルールのもとで、自分だけが勝ち残ろうとしても、うまくいかない可能性が高い。地球は一つで、人々はみなつながっているのだから。

私たちはこのまま自然を破壊する道を突き進んで、分断や孤立^{こりつ}化を推し進めるような社会をつくるのか。それとも、人々とのつながりや相互扶助^{たがひたすけ}、連帯や平等を重視し、自然を大切に持続可能な社会への転換^{てんかん}を図るのか。その分岐点に、私たちは立っている。未来がどうなるかはわからない。 **Y**

ところが、資本主義で競争して、自分だけが生き残ることに必死になっている大人たちには、この社会を変えるためのビジョンを思いつくことができない。

だとすれば、新しい世代が立ち上がって、社会を動かすしかない。

(斎藤幸平「ポストコロナにやってくるのは気候危機」『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』晶文社より)

注1 買い叩いている……非常に安い値段まで下げさせて買っている。

注2 パンデミック……伝染性の強い感染症が世界的に急激な広がりを見せること。

注3 コストカット……商品の生産に要する費用の一部を削ること。

注4 スキャンダル……関係者にとって不名誉で好ましくない事柄。

注5 多国籍アグリビジネス……複数の国で事業を行い、国境を越えて農産物や食品を動かす、農業・食品関連企業。

注6 石油メジャー……石油供給の大部分を独占してきた国際的石油会社。

注7 脆弱……もろくよわいこと。

注8 相互扶助……互いに助け合うこと。

※ 作問の都合上、段落の途中から本文を引用しています。

問1 A～Cに入る言葉として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア また イ だから ウ 例えば エ けれども オ あるいは カ では

問2 ——①とありますが、食料自給率の低い日本に影響が出る要因を、本文の内容に合わせて次のようにまとめました。

(1) (4)に入る言葉を後のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

(1) の裏では (2) が起きている。そして、(2) は、(3) という形で日本にも影響を与えはじめている。今後

(3) によって (4) が生じると、食料自給率の低い日本に影響が出る可能性がある。

ア 気候変動 イ 世界的な食糧危機 ウ 自然破壊 エ 豊かな生活

問3 Xに入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ロ イ 手 ウ 腰 エ 尻 オ 足

問4 ——②とありますが、「私たち」はどのような社会に進む分岐点に立っていると筆者は考えていますか。その分岐点の先にある社会を二つ、三十二字と三十九字でぬき出し、それぞれ初めの五字を答えなさい。

問5 ——③とありますが、「しっぺ返し」という言葉を正しく用いている文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 犬にちよつかいを出した後、その犬に嘔まれるというしっぺ返しにあった。

イ 友だちとケンカをした帰りに、雨にも降られるというしっぺ返しにあった。

ウ なくしたペンが、思いも寄らない場所で見つかるというしっぺ返しにあった。

エ 人を助けたことで、感謝状を贈られるというしっぺ返しにあった。

オ 前を見ずに歩いた結果、人にぶつかるというしっぺ返しにあった。

問6 ——④「普段」は、次のア～オのどの言葉にかかっていますか。記号で答えなさい。

ア 私たちは 普段 どれほど 他者と つながっているかを 痛感させられるのだ。

問7 — ⑤とありますが、「リスクに晒される」とは、「危険な状態に置かれる」という意味です。「エッセンシャルワーク」をしている人は、どのようなリスクに晒されているのですか。そのようなリスクに晒されてしまう理由もふくめて、四十字以内で答えなさい。

問8 には次のア～オの五つの文のうち三つの文が入ります。その三つの文を選び、意味が通るように並び替えて、記号で答えなさい。

- ア だからこそ、経済成長を最優先にしたシステムからの大転換が今こそ必要なのではないか。
- イ けれども、有限な地球で無限の経済成長を目指すことは、どう考えても、不可能である。
- ウ 経済成長ではなく、自然との共存や人々の幸福を重視する経済への転換が。
- エ しかし、有限な地球で無限の経済成長を目指していけば、明るい未来が待っていると確実に言える。
- オ 経済成長を最優先にして、これまでどおりの私たちの生活を維持する、その覚悟を決めればよいのだ。

問9 次の各文の中から、本文の内容に合っているものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 300円の牛丼は、他国の料理では再現できない和食の美味しさを象徴するような料理である。
- イ 新型コロナウイルスのまん延からもわかるように、人間が自然を完全に支配することは出来ない。
- ウ 生活に困る人が一人もいない日本であるために、大量生産・大量消費を続けるべきである。
- エ 危機的な状況に対応するために、今まで通りの生活を続けようという強い意志を皆が持つ必要がある。
- オ これからの社会を作るためには、今までにないビジョンを描ける新しい世代の力が必要である。

問10 次の会話文の中の I・IIにあてはまる言葉をそれぞれ指定された字数で本文中からぬき出し、それぞれ初めと終わりの三字を答えなさい。

獨太 この文章を読んで、大人の憧れるような生活は、自然を大切にすることは両立しないとわかったよ。

協平 日本が生活に必要なものを作ることができないのは知っていたけれども、日本の華やかな生活の裏で、世界の自然破壊が進んでいたなんて知らなかったよ。

獨太 それにしても、どうして日本の大人たちは、世界で深刻な自然破壊が進んでいるのに、気にしてこなかったのだろう。

協平 自然破壊が 離れたところで起きていたから、他人事だったんだろうね。あとは、 から、見て見ぬふりをした方が都合良かったんじゃないかな。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ながとろ高校カヌー部は、小学校からペアを組んでカヌーの大会に出場してきた鶴見希衣（部長）と天神千帆（副部長）が入学して創部された、部員二人だけの部活である。小学校時代には全国大会優勝の経験もある二人だったが、中学から学年が進むにつれ試合に勝てなくなってしまう。二人が高校二年に進級した春、二人の新入生が入部を希望してきた。そのうち一人は一七〇センチメートルを超える身長を持ち主で、カヌー経験者の湧別恵梨香だった。恵梨香が入部してまもないある放課後、恵梨香と二人で練習することになった希衣は、これまでタイムを計ったことがないという恵梨香の実力を確認するため、競争することを提案した。

「そこらへんの事情はよく分かった。ま、とりあえず最初は二人で競争してみよっか。いきなりタイム計るのもアレだし」

「二人で、ですか」

「そう。並んで、よいいドンを合図に進むの。あそこの大きい岩が見える？ 岸から出っ張ってるやつ」

角ばった岩を指さすと、恵梨香はコクリと首を縦に振った。

「ここからあの岩までが、大体五〇メートルぐらいあるのね。本当はちゃんと距離を測って目印のウキとか使うべきなんだけど、今日はあくまでお試しレースということで」

「分かりました。人と並んで漕ぐの、初めてです」

「言っておくけど、全力でね。湧別さんの実力を見極めたいから」

「はい」

パドルを構え、二人は横一線に並ぶ。経験者だからこそ簡単に出来ることだが、同じ場所に留まり続けるのはなかなかのテクニクが必要だ。初心者が多い新人戦ではスタート位置に並ぶだけで落水する選手が続出するが、これが初レースだと言う恵梨香にそう

した心配は不要なようだ。体の軸が安定しているからか、揺れが少ない。

風が風ぐ。静寂の満ちる空間にナイフで切れ目を入れるように、希衣は鋭く号令を飛ばした。

「よいい、ドン！」

その瞬間、視界の片隅で黒い塊が急加速した。右に、左に。パドルの先端についたブレードが、しなやかに水を掻きわける。静かだ、と真っ先を感じた。恵梨香の漕ぐ回数は、極端に少ない。一度のストロークが大きいからだ。上がる飛沫はすぐさま水底へと吸い込まれ、透き通る水の匂いが風圧となって希衣の身体へ押し寄せた。波を受け、カヌーが大きく揺れる。目の前を進む恵梨香は、既に後ろ姿しか見えない。まるでバトントワリングの如く、彼女のパドルは円を描く。美しい、洗練された動きだ。

ハッ、と荒い呼吸が希衣の唇から飛び出す。恵梨香が三度パドルを回す間に、こちらは五度は漕いでいる。回数は勝っているのだ。なのに、視界の隅にちらつく彼女の背は、どんどん小さくなっていく。苦しい。辛い。息が出来ない。三〇〇メートルを超えた辺りから、体は悲鳴を上げ始める。ストレッチャーを蹴り上げ、パドルで水を押し出すのと同時に腰を捻る。同じ動作の繰り返しのはずなのに、疲労によりフォームが乱れ始める。先へと進む恵梨香のフォームは、スタート時となら変化ないというのに！ もうすぐ、四〇〇メートル。パドルを操作する腕が軽い。ブレードが上手く水を掴んでいないのだ。 A ような感覚に、希衣は顔を

しかめた。いつもそうだ。いつも、後半で伸び悩む。顔を上げると、恵梨香が既にゴール地点に到達したのが目に入った。

カヌースプリントという競技は、その性質からか、しばしば陸上競技に例えられる。マラソンのラストスパートが永遠に続く感覚、とでもいえばいいのだろうか。或いは、短距離走のスタートダッシュをゴールまで保ち続ける感覚といった方が近いかもしれない。こんなに苦しいのに、止められないのは何故だろう。ブレードが、水を切る。途切れそうになる集中を何とか繋ぎ止め、希衣は大きく腕を振る。目印である岩が傍らを通り過ぎたことを確認し、そこでようやく希衣は腕に込めていた力を抜いた。

「お疲れ様です」

先にゴールしていた恵梨香が、ゆっくりとこちらへ近付いてくる。未だ息を乱している希衣とは対照的に、恵梨香は普段と何ら変わらぬ様子で優雅にパドルを動かしていた。

「人と競ったことはこれまでなかったんですけど、隣に舟があるとすごく波が来るんですね。最初、漕ぎにくくてびっくりしました」
「あれで？ こっちとしては速すぎてビックリしたんですけど」

恵梨香の全力は、驚異的なスピードだった。希衣とて小学生の頃からカヌーを続けているのだ、平均的な選手より実力があるという自負がある。だが、恵梨香のパドル捌きはレベルが違った。圧倒的な実力差は、人から僻む気力すら削いでしまう。

① 希衣の台詞に、恵梨香ははにかむように頬を掻いた。

「速かったですか。基準が分からないので、どうなんだろうって思ったんですけど」

「体感的に、信じられないくらい速かった。インターハイの優勝、狙えるって思うくらいに」

「そんな、そこまで大したものじゃないです」

「いや、マジですごかったって。それに湧別さんのフォームって、あの子に似てるんだよね」

「あの子というのは？」

「利根蘭子。さっき言ってた、去年のインターハイの優勝者」

希衣たちと蘭子の出会いは、小学生時代にまで遡る。大阪に住んでいた蘭子とは大会が重なることはほぼなかったが、小学生のカヌー人口が少ないということもあり、全国規模の大会の際には顔を合わせることがあった。あの頃、小学生部門で千帆は敵なしだった。優勝者に与えられるトロフィーも賞状も、千帆の手中に収まるのが当たり前だった。そして、無敵の女王である千帆の相棒は、いつだって希衣だった。

その活躍に陰りが始めたのは、中学二年生の頃だ。それまで格下だと思い込んでいた生徒たちに、徐々に千帆が負け始めた。一番大きな要因は、千帆の背があまり伸びなかったことかもしれない。スランプに陥った千帆は、結果に固執することを止めた。彼女は勝利に慣れていたが、敗北には弱かった。

② その一方、幼い頃は小さかった蘭子は、気付けば一七〇近い長身の選手になっていた。彼女は速く、強かった。めきめきとを現した蘭子はいっしょか同世代の大会では絶対王者として君臨するようになり、海外の大会でも活躍するトッププレイヤー

へと進化を遂げていた。

「中学二年生の全国大会の時にね、私と千帆は利根蘭子のペアに負けたの。一応、私たちだって全国二位だったけど、タイム的には完敗だね」

あの時、遠ざかる蘭子の後ろ姿を、希衣はただ見ていることしか出来なかった。敗北に震える千帆の背中、希衣が支えるにはあまりに小さすぎた。

③ 「そこから、もう全然勝てなくなっちゃって。中三の時はペアで五位。高校に入ったらインハイ出場すら難しくなっちゃって……千帆は才能があるのに、本気を出すのを止めちゃったんだよ」

でも、と希衣は言葉を続ける。漕ぎ終えてすぐのせいか、ひどく体が熱かった。

「湧別さんだったら、もしかしたらって思うの」

「もしかしたらって、何がです？」

「だからそれは——」

あなたが千帆とペアを組めば、インハイで優勝を狙えるかも。

④ 浮かんだ言葉は、既のところ喉の奥に留まった。凍り付いたように強張る舌は、願望を口にすることを拒絶していた。胃の奥底がジリジリする。どうしてだろう。千帆が大会で勝つことこそが、自分たちの幼い頃からの夢のはずなのに。

⑤ 沈黙した希衣に、恵梨香が探るような眼差しを寄せた。

「さっき漕いでて思ったことがあるんですけど、いいですか」

「ん？ 何？」

「えっと、その、」

余程言い辛いことなのか、恵梨香は気まずそうに目を伏せた。エメラルドグリーンの水面で、白と青のカヌーの影が揺らめいている。彼女はパドルを握りしめると、意を決したように面を上げた。

「先輩のフォームって、なんだかすごく窮屈そうです」

え、と無意識の内に声が漏れた。手から滑り落ちたパドルが、水上で波紋を広げていた。

(武田綾乃『君と漕ぐ ながとろ高校カヌー部』新潮社より)

注1 そこらへんの事情……今まで恵梨香はカヌーを完全に趣味でやってきており、競技カヌーで重視するタイムや大会とは無縁に過ごしてきたこと。

注2 パドル……カヌーを漕ぐのに使用する道具。櫂。

注3 ブレード……パドルの先端にある水をとらえる部分。

注4 ストローク……ブレードで水を掻いて漕ぐ動作。

注5 バトントワリング……棒状の道具(バトン)を回転させる(トワリング)という意味をもち、バトンの操作と身体の動きを音楽に合わせて組み合わせるスポーツ。

注6 ストレッチャー……カヌーの足かけ。

注7 カヌースプリント……静水面で一人乗りから四人乗りまでのカヌーにのり、一定の距離と水路(レーン)を決めて複数の艇が一斉にスタートして最短時間で漕ぎ、着順を競う競技。

注8 インターハイ……全国高等学校総合体育大会のこと。高校生にとって、この大会で優勝することが全国の頂点に立つことを意味する。

問1 A に入るものとして最もふさわしい表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 空に輝く イ 空をかける ウ 空をみつめる エ 空を切る オ 空を仰ぐ

問2 ①とありますが、この時の恵梨香の心情の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 希衣に勝利したにもかかわらず、「漕ぎにくくてびっくりしました」と自分が全力を出し切っていないような発言をして先輩を傷つけたことを後悔している。

イ 「速すぎてビックリした」という希衣の発言が本心からのものなのか、自分に向けられた嫌味なのか分からず困惑している。

ウ 自分の実力がどの程度か分かっていなかったため、希衣に自分の漕ぐ速さをほめられて照れくさいと感じている。

エ 我を忘れて漕いだ結果、希衣に圧倒的な実力差を見せつけることが出来てうれしいが、態度に出すのは失礼なので喜びを顔に出さないようにしている。

オ 圧倒的な差で勝利したにもかかわらず、僻む態度も見せずに褒めてくれる希衣を素晴らしいと思うとともに、先輩に勝ってしまったことを申し訳なく思っている。

問3 ② を現した」が、「才能・技量などが、周囲の人よりも一段とすぐれること」という意味になるよう、 に当てはまる漢字二字を答えなさい。

問4 ③ 「一応」は、次のア～エのどの言葉にかかっていますか。記号で答えなさい。

一応、
ア 私たちだって／全国二位だったけど、
イ タイム的には／完敗でね
ウ
エ

問5 次の会話文は、——④の表現について、生徒たちが話し合っているものです。次の生徒の発言のうち、表現の説明として最もふさわしいものを選び、ア～オの記号で答えなさい。

ア 生徒A この時は希衣も相当ショックを受けたみたいだから、千帆の姿がぼんやりとしか見えなかったってことを「小さすぎた」と表現したんじゃないかな。

イ 生徒B この表現は、蘭子に初めて敗北し、「背中」が「小さ」く見えてしまった千帆とのペアではもう勝てないと希衣があまりきらめてしまったことを表しているのだと思うよ。

ウ 生徒C わたしは、今まで千帆と一緒にいっしょのペアで負けなしかった自分たちが、負けてしまった瞬間に感じた自分たちの無力さや今後の決意を、千帆の背中を通して希衣が表現したんだと思うな。

エ 生徒D いや、「背中」が「小さ」く見えるほどに千帆が敗北のショックを受けているから、希衣にはどのように支えればいいのか分からない状況だったことを表しているんじゃないかな。

オ 生徒E そうかなあ。「蘭子の遠ざかる背中を見ていることしかできなかった」っていう段階で希衣は勝負をあきらめていていると思うから、敗北のショックを感じている千帆と希衣の感情がはず離れてしまっていることを表してるんだと思うよ。

問6 ——⑤には、千帆のどのような特質が関係していると考えられますか。その特質を述べた一文を本文中からぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問7 ——⑥とありますが、ここでの「願望」とはどのような願いだと考えられますか。四十字以内で説明しなさい。

問8 ——⑦とありますが、なぜですか。その理由を四十五字以内で具体的に答えなさい。

このページに設問はありません